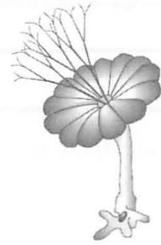


ご あ い さ つ

日本藻類学会会長 石川依久子



歴代の権威ある学会長のあとを受けて、風格の無い異質な会長が就任し、会員諸氏のみならず本人も戸惑っております。

この上は、この異質性を良い方に活用し、会員の皆様とのごつくばらんな対話の上に立って皆様の便宜を計ると共に学会の発展のために寄与することができれば幸いと思っております。

藻類学会は、理学系、水産系の雑居所帯であると同時に、研究も、分類学、生理学、細胞学、生化学、生態学と多様であり、研究目的も、食料、環境、医薬、教育、科学と多様です。その上、藻類は海産、淡水産があり、さらに藻類の種類に至ってはナノプランクトンから数十メートルの海藻までであるのですから、学会の内容は実に多様的で重みがあります。藻類学会はもはや植物学会の下に位置する一組織であるというような古い観念は通用しません。藻類学会の内容と意義を学会外にも十分認識させ、藻類学会が社会に大きくクローズアップされて行くようにしたいものです。

一方、藻類学会は、この多様性ゆえに、運営上の難問を抱えています。まず、すべての会員が満足できる学会誌の編集は不可能に近いものがあります。学会が主催するシンポジウムも一度に多くの会員を満足させることは不可能です。学会への有力な助言も分野が片寄っていると受け難いことがあります。このような難問を数えていくと藻類学会の存続すらも危ぶまれてきます。しかし、視点を変えてみると、この多様性は、会員にとって大変有意義なことでもあります。藻類学会の多様性を利用すれば、藻類の広い知識を吸収して自らの仕事の糧にすることができますし、同時に、試料の調達や技術面でお互いに便宜を計り合うことができます。また、会員がそれぞれ別の学会や団体にも関わっているので、会員のネットワークを介して広く社会や世界に接する機会が藻類学会の中に沢山あります。

藻類学会は単なる業績発表の場としての学会ではありません。「藻類」という共通語で語り合える仲間の集まりです。会員相互のコミュニケーションをよくし、そしてその中から沢山の物を得る場であるべきだと私は思います。

会員の皆様、進んで学会に参加され、会員にとって望ましい学会を育てていくことにご協力ください。